

産学官連携「サイン」学習プロジェクト

- 暮らしの中のサインをデザインしよう! -

仙台市立北六番丁小学校 4年 永井一也 岡本 由起
 仙台市立寺岡小学校 4年 佐藤由美子 藤井由美子 高橋康一 菅原 保子
 宮城大学助手 田代久美 せんだいメディアテーク 青木 茂
 株式会社三菱総合研究所 吉村春美 佐藤慎一 森田 秀之
 キーワード：産学連携，総合的な学習，インターネット，地域教育施設，デザイン

1. 本プロジェクトのねらい

「暮らしの中のサインをデザインしよう!」(以下、本プロジェクト)は、平成14年度コンピュータ教育開発センターの地域産業協力型教育情報化推進事業に採択された。

本プロジェクトは、暮らしの中にある身近な「サイン」(標識や案内図、マーク等)を通じて、人の立場に立って考えること、公共とは何かということ、文化やメッセージ性の違いなどについて、体験から総合的に学習し、情報活用能力およびコミュニケーション能力を高めることを目標としている。実践にあたっては、サインに関わる産業界の人材と連携するだけでなく、地域教育施設であるせんだいメディアテーク(<http://www.smt.jp>)や地域NPOなどと連携し、新しい学習スタイルを模索した。

2. プロジェクト概要

本プロジェクトは、2002年11月から12月にかけて、仙台市立北六番丁小学校4年生2クラス46名と寺岡小学校4年生3クラス100名の児童を対象に約20時間の授業を実施した。事前準備に約3ヶ月を費やし、グラフィックデザイン、建築、出版印刷業界の講師らと共同で授業計画を立て教材を作成した。授業は「サインとは何か?」から「学校のサイン制作・設置」までを学校、地域社会の中で体験しながら学習できるように構成されている。特徴は、実社会での学習体験をベースにすることで、学校における学習が「知識」として切り離されず、よりリアリティーを持たせた点、また本プロジェクトのためのポータルサイトを構築し、事前事後学習及び実践校同士や講師との交流を支援している点である。授業概要は表1のとおりである。

表1 授業概要

時限	テーマ	授業実施者	連携スタイル
1	「情報リテラシー講座」	渡辺徹(プロカメラマン) エルネット仙台	学校-地域NPO
2	「サインって何? :サインを考える」	永原康史(グラフィックデザイナー) 永原康史事務所	学校-産業界
3	「暮らしの中のサイン探し」	小学校教諭	学校-地域社会・地域NPO
4	「ポータルサイトを使って活動記録を残す・発信する」	小学校教諭	学校-インターネット
5	「公共空間のサイン」	鈴木明(建築家) 樹建築・都市リサーチ	学校-地域教育施設
6	「学校のサイン企画」	小学校教諭	学校-インターネット
7	「サイン制作現場から」	菊地淳(出版印刷会社取締役) ハリウコミュニケーションズ㈱	学校-産業界
8	「学校のサイン制作・設置」	永原康史(グラフィックデザイナー) 永原康史事務所	学校-産業界
9	「サインを考える」	小学校教諭	学校-インターネット

3. 本プロジェクトの効果

3.1 産業界の講師による授業の効果



図2 産業界講師による授業

第一に、産業界による授業は、児童が専門家から直接話しを聞くという貴重な学習機会を増大させ、実社会の仕組みに対する児童の理解を促進させる効果があった。小学校の教師だけで計画された学習は、型にはまったものになりやすく、専門的分野を指導するには限界もある。これからの社会を担い、貢献していく子どもたちには、様々な職業が社会に貢献していることを伝える意味でも、今後もこのような授業を行いたいと考える。第二に、産業界の講師と学校が連携して授業計画や教材開発を行うことによって、児童の学習意欲を高める効果があった。学校の教師による普段のきめこまやかな授業に加え、産業界の講師の自由な発想で企画されたワークショップ型授業や専門知識をわかりやすく説明するビデオ教材などが、児童の興味を深化させることに貢献したと思われる。

3.2 地域社会との連携促進

本プロジェクトでは、学校に講師を招くだけでなく、地域の商業施設（駅やホテル）や教育施設（せんだいメディアテーク）を学習活動の体験フィールドとして活用した。このような体験は、児童が社会とのつながりの中で学習テーマを理解することを助けるとともに、公共施設利用時のルールや利用方法などを同時に学ぶことができるメリットがある。しかし、学校外の学習活動を実施するにあたっては、利用施設や児童の安全確保に関して多くの人々の理解と協力が不可欠である。本プロジェクトでは、せんだいメディアテークや地域で活動する NPO、宮城大学の学生など多くの人々の協力を頂いた。これを機に、学校と地域社会の連携がより深まり、子どもたちが学校以外にも安心して学習できる場所や地域との接点を増加させていきたいと考える。



図3 せんだいメディアテークでの授業風景

3.3 インターネットの活用



図4 本プロジェクトポータルサイト

産業界講師授業の事前事後の学習を支援することを目的として、ポータルサイトを構築した（URL: <http://sign.itx.jp/>）。主コンテンツは、産業界講師の知見が集積したサインに関する知識データベースであり、その他、児童の学習活動を記録するためのノート機能、画像投稿が可能な掲示板機能、児童のノート閲覧機能（教師用）を持っている。児童はログイン名とパスワードを付与され、自分だけのノートをサーバーに持つことができる。4年生という発達段階では、相手からのレスポンスに対する期待が学習意欲を高めていたように思われる。時間の関係から、児童が収集したデータをデータベースに追加し、オープンソース的なサイン百科事典を作り上げるなど発展的な利用をするには至らなかったが、今後も、子どもたちの働きかけによって拡大可能な、この事前事後（ハイブリッド）学習支援システムを応用し、学校や地域教育施設と連携しながら活用を進めいきたい。

4. 課題

本授業では産業界の講師による授業に対して一定の成果が認められたものの、授業計画、教材開発については、産業界と学校がさらに連携を深めることが重要であると感じた。そのためには、可能なかぎり、産学官連携授業を学校の年間計画に組み込み、計画の段階から十分な協議、準備を行うことが望ましいと思われる。

5. まとめ

学校が産業界、地域と連携して行った本プロジェクトを通じて、子どもたちには、これまで見過ごしていた物（サイン）に気付く楽しさや、背後にある職業（社会）やサインの意味を伝えることができた。児童の感想に、「サインで相手に伝えることもできるようになった。」「自分だけでなく、他の人が見てわかりやすいサインを作ることができるようになった。」「自分で考え、自分で作り、色をよく使い分け、板の大きさ、色を選び、どこに貼るかを考えて見やすくシンプルに書く事をよく頭に思い浮かばせることができました」などあるように、児童はサインという新しい視点を通じて、コミュニケーションや情報を活用することを意識し、リアリティを持って社会と関わることができたようだ。

産学連携が容易でないことは確かであるが、児童に与えるインパクト及びその効果が大変大きいことを実感した。今後も、学校、産業界、地域社会、インターネットなど多層的（ハイブリッド）な学習環境の提供を目指したい。

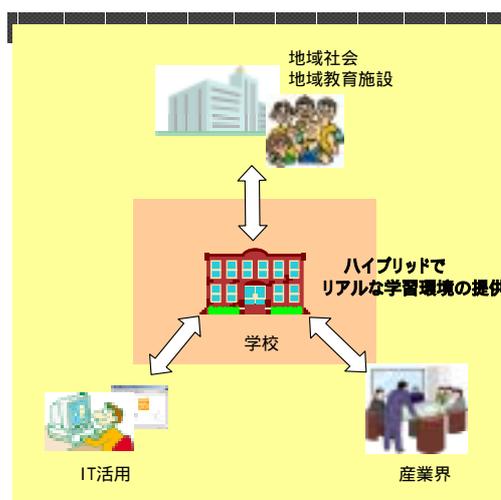


図5 産官学 + 地域連携の学習スタイル